
ガイアの持ち主

ガイア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガイアの持ち主

【Nコード】

N7553Y

【作者名】

ガイア

【あらすじ】

ある平凡な中学生でありながら友達が非常に少ない少年の夢の中にだけ出てくる謎の少女

彼女を中心に、少年の人生が大きく変わる

学園系&アクション&恋愛(?) 小説ここに至る！

始まりの意志と石（前書き）

最初の方は文法などがめっちゃくちゃですが、後々よくなっていきますのでよろしくお願いします

始まりの意志と石

俺は今、夢を見ている。将来の夢などではなく、寝ている時などに見る夢だ。

なぜか、いつも同じ夢だ。いつも同じ長い黒髪女の人が、同じ場所に立っている。年は同じくらいだ。それからいつも夢が始まる。

だが、ここからはいつも違う。

違う服を着て、違う会話をして、違う所に向かって歩いたり、走ったりもする。この前なんか、どういう訳か競争するはめになった。なのに、俺はその人の事は知らない……。少なくとも夢でしか会った事はない。本人も、俺とは現実では会った事ないと主張している。

まあ顔は、そこそことのっている様な気がする。

この前、友達にこの事を話してしまった。次の日、俺の家に腕の良い心理学のお医者様を連れてきて、散々な目にあった……。

その腕のいいお医者様が言うには、この女の人、俺の『妄想』だそうだ。

だが、俺はそう思えない。だってこの人は、俺の聞いたことの無い名前を持っていた。

その名前は、水無神みなかみ 操緒みさお

誰なんだ……。マジで。

今日の朝は、腹部の激痛から始まる。

「ぐふ！」

これが今日の一言目だ……。

自分の、未だに痛みが走り続ける腹部を見ると、すばらしいままでに肘が食い込んでいた。

ふっ！

と、鼻を鳴らして、天井を見上げた。

今日も無事に目覚める事が出来た。もしかしたら、未来の俺の死因は、これなんじゃないかな・・・

こんな事を考えながら天井を眺めていると、何かが天井を隠すように覆いかぶさった。

この肘の所有者でありながら、俺の死因である方・・・
苑宮 そのみや 和 か
葉 ずは である。

「どう 起きた？」

なぜかいつも楽しそうにこう聞く。

「ああ このまま二度と目覚める事ない眠りにつきそうだ・・・」
腹部に走る激痛に耐えながらやっとの思いで答えた。

「なら もう一丁」

はきはきした口調で答えながら、腹にめり込んだ肘をぬき、またいつでもめり込ませるぞ、と言わんばかりの体制に入る。次の動作に入る時にはきつと、俺は深い眠りについていることだろう・・・

それだけは回避しろと俺の本能が叫びまわっている、

「わ、分かった。分かったから、もうやめろ！ 俺もまだ長生きしたい！」

マジで叫んだ。そう、俺はまだ長生きしたいのだ。

「長生きしたいなら、さっさと着替えて、ちゃっちゃんと朝食を食べなさい」

満面の笑みで言わないでくれ、とてもかわいいのだが、マジで怖い・・・

始まりの意志と石（後書き）

いろいろとパクリキャラが出ている事をお許し願いたいです☆

いくつかネタもパックっておりますが、主なストーリーはオリジナル品なのでよろしくお願いします

始まりの意志と石

現在時刻7…30

まだ、学校に行くには早いような気がするのだが・・・

いちいち愚痴っていたら、いつ命が狙われるか分からないのでやめておく。

俺は、1分で着替えて、2分で食事を済ませるというスキルを身につけた。これは、命の危機に陥っている時にしか発動出来ない特別な物だ。和葉は、俺を横目にテレビをのんき眺めている。おのれいつか覚えていろよ、という危ない気持ちは心の深いところに締まっておこう。

2011年12月24日金曜日これが今日の日付だ。

そう、クリスマス・イブ。

世間の子ども達は、ウキウキした気持ちで学校に通学することだろう。

俺は、朝から地獄だ・・・

まず、あいつどうやって我が家に侵入したんだ・・・ 玄関の鍵は、和葉が入ってこれないように、と言う念まで込めて閉めたはずだ。

どうやって入った。窓から？ いや、もしそうだったら近所の方々が確認して俺の耳か、警察に言ってくれているはずだ。

煙突？ いや、我が家にはない。本人に聞く？ 馬鹿か俺、殺されるぞ本人は鼻歌を歌いながらテレビを見ていた。

現在時刻7…58

『目覚ましテレビ』の『今日の占い』のコーナーを見終わった後家を出た。

鍵を閉める時、鍵変えようかな・・・、と言う思いが頭をよぎった。女の子と二人で登校。

これは、全国の男達の夢であろう。

だが、今俺のやっている事はそんな生ぬるいものではない。

そこそこ、楽しい会話をしているのだが、いつ襲われるか分かったものではない。

なぜ、こんな事になったのだ。

俺は会話を続けながら、自分の人生を振り返った。

有田 晴紀ありた はるきこれが俺の名前だ。通称「はる」

1996年6月2日産まれの、ふたご座

大阪市立大正東中学校（通称 東中）の今は2年4組3番もうすぐ3年だ。

和葉とは、小学校で出会った。今思えばある意味、運命の出会いだったのかもしれない。

和葉は、偶然にも家が近かつたせいで、親同士で仲良くなり、ちよこちよこ家に遊びにくるようになった。

小学5年になった頃からだ、俺を朝起こしに来るようになったのは・・・
クラスメイトが俺を羨ましいそうにみる。お前らが思うほど好いものではないぞ、と心の中で叫んだ。

よく勘違いされやすいのだが、俺と和葉は付き合っていない。付き合えるはずがないだろ・・・

中学生になって、親同士が長期的に海外旅行をする事になった。

それから、和葉は俺の家に、自分の家のように顔を出すようになって、今に至る。

なんてついていない人生なんだ。いや、これは何か憑いている。
その時おれの頭の中に、夢でしか出て来ない少女、操緒の姿が頭
によぎった。

「ねえ、ちょ 聞ってるの？」

「え、 あ ああ、ちゃんと聞ってる」
しまった！ ぼーっとしてた！

「そ ならいいんだけど・・・ それでね、そしたら彼いきなり
ビックリしてさー・・・」

そんな話をしていると、後ろの方から足音が近づいている事に気づ
き振り返ろうとしたら、いきなり肩に手を回されて、

「よっ！ ハ・ル」

と、俺と和葉の間で言った。もうちょつとまじな登場の仕方はなか
ったのか・・・

「おはよう、樋口」

答えたのは和葉だった・・・

「おはよ！ ん？ お、ハル今日も死にそうな顔してるな」

樋口がニヤニヤながら言ってきた。

こいつは樋口 琢磨ひぐち たくま。俺の数少ない友達の人だ。

俺が、夢の話を相談したのは、こいつだ。

「ああ 朝から死にそうな目にあつたよ」

「いいじゃねえの 女の子に朝起こしてもらうなんて贅沢、なか
か出来ないぞ」

樋口が楽しそうに言う

「そう ハルは私に起こしてもらっているだけで贅沢できてるんだ
から。」

「毎朝死にそうな目にあってもか？」

「そう」

きっぱり答えた。

「それに苑宮は、結構人気あるんだぞ。俺なんか何回苑宮に告って、

振られたと思ってるんだ・・・」

そう、樋口は和葉に15回告白に挑戦して、ことごとく蹴散らされているのだ・・・

「お前、まだ和葉の事好きなのか？」

「ああ そうさ俺はまだ好きなのだ」

和葉は、笑顔で答えた。

「黙れ」

16回目・・・

始まりの意志と石（後書き）

出来たら感想などをよこしてもらおうとうれしいです

始まりの意志と石3 (前書き)

二話目のタイトルが1話目と同じで申し訳ありません
まだ慣れてないもので・・・

始まりの意志と石3

学校の前まで着き、俺たちを待ってたのは、西川先生 通称「鉄人」校門の前で朝のあいさつをしている。

「鉄人」このあだ名の由来は、まずその体系だ。ムキムキのムチムチなのである。簡単に言えばゴリマッチョ！

そしてもう一つ、なぜか彼は、持って来てはいけない物を学校に持って来ている生徒を、一目で見抜いてしまう。

人はそれを、「鉄人スコープ」と呼ぶ。

そして、今日もまた「鉄人スコープ」の餌食になっている生徒が一人・

「ん？ 貴様これは何だ！」

そう言って目の前にいる生徒のカバンに手をつ突っ込んだかと思うと、取り出しは、PSPである・・・

「げっ 嘘だ！ いつもより慎重に隠したのに！」

本当にどうやって見抜いてるんだ？ あれ・・・

「うわぁー いやだ！ 生徒指導室だけはいやだぁぁあ！」

「問答無用！ ほれ、連れて行け」

そう言うのと生徒会の連中が、引きずるように連れて行った・・・

可哀想に・・・ 長いんだよな・・・説教

俺も以前、マンガを持って来て生徒指導室でお世話になった事がある。

「あの生徒、1時間ぶつとうしで説教なんだろうな・・・樋口」

そう言って樋口の顔を見ると、震え上っていた。

「樋口？ どした？ まさか、お前！」

小さく、うなずき

「俺・・・エロ本持ってきた・・・」

ここにまた、「鉄人スコープ」の餌食になる人が、また一人・・・

「ハル！ 俺ヤバイよ！ これで16回目だよ！ 次やったら2時

になっていなければいいのだが・・・
なぜか和葉は楽しそうに眺めていた。
・・・鬼だ！

結局、樋口が帰って来たのは2時間目だった。

樋口からは、生气という物が感じられない

「おい 樋口大丈夫か？」

「ん？ あ、ハルか・・・ まあな・・・」

嘘だ・・・ 2時間の説教はこれほどのものなのか・・・

「樋口！ 尊敬する人はだれだ！」

いつもだと即答で、上戸彩なのだが・・・

「・・・夏目漱石だ」

「おい 樋口戻って来い！」

そう言って肩をゆすると、

はっ！ と、目が覚めたようなそぶりをしてキョロキョロしている
生き返った・・・

「ハル・・・俺は何を・・・」

「樋口！」

「ハル！」

そんな事していると後ろから声がした、

「なに馬鹿な事してんの、もうすぐ授業始まるよ」

和葉だ・・・ 樋口にはもう気が付いているはずだ・・・

その瞬間にチャイムか鳴った。おなじみのあのチャイムだ。

そしたら先生が来た。

俺たちは、おとなしく席に戻った。

俺の席は、窓側の一番後ろのせきだ。そこそこいい席で気に入って

いる。

和葉の席は、俺の斜め前だ。近い・・・

樋口は、遠い・・・

授業が始まった。俺はすぐに眠りについた・・・

俺は、あそこにいた。

いつもの場所、いつもの香り。夢の中だ・・・

そして、そこには彼女もいた。

「ふーん まさかこんな時間くるとはね・・・ 予想外」

「俺はいつ寝ても、ここに来るのか？操緒」

そう操緒である・・・

「べつに今日知ったわけじゃないでしょ？」

楽しそうに答えた。

こいつは、いつも楽しそうだ。

こいつは、俺が5年生なった頃から俺の夢の中いる。

そして、俺たちと同じように成長している。

「もしかして、操緒に会いに来たの？」

「違う　なんで俺がわざわざ不気味な夢の中にいる人に会いに来ないといけないんだよ」

「うわ　不気味って事は無いでしょう　これは晴紀のイメージなんだから。」

イメージ・・・　こいつも俺のイメージなのか・・・

「あつ　操緒はイメージじゃないんだから」

「・・・」

俺が今言ようとしていたことだ・・・　先を越された。

こいつは性質が悪い。ある意味和葉より性質がわるいかもしれない。

操緒は、誰よりも俺の事を知っている。

俺の見た物、聞いた事、話した事、感じた事全部を知っている。

俺のベッドの下にある『男のロマン集』の秘密をこの世界でたった一人知っている人物だ。

「なら、お前何なんだ？ 毎日人の夢の中に入ってきて」

「操緒が晴紀の夢の中に入ってるんじゃないくて、晴紀が操緒の所に來てるんだよ」

少し真面目な顔になってそう言った。

「なら、俺が幽体離脱でもしてわざわざお前所まで、プカプカ飛んで行ってんのか？」

新しい情報だ！ でも、俺が幽体離脱を本当にしてんのか？ ザ○ツチでもあるまいし・・・

そんな馬鹿な事あるわけないよな。

「うーん ちょっとだけ違う」

少し当たってんのか・・・

「なら、ここは何処なんだ？ さっきここは俺のイメージだとか、なんとか言ってたろ」

「うん」

あっさり答えた

「なら俺のイメージに、俺が飛んで行ってんのか」

興奮して少し早口になった

「正確に言えば、晴紀のイメージじゃなくて、晴紀のイメージの形になる所」

「意味・・・分かんない・・・」

なにがなんだか、さっぱり分からなくなってきたよ。

俺のイメージになる所？ 今のこれは、今の俺のイメージじゃないって事？

じゃ、ここは何処なんだ？ 迷子なのか俺？

そんな俺を、楽しそうに眺める操緒。

俺を騙した？ と言う事は考えられるが、操緒はこれまで俺に嘘を

ついた事がない。だから多分これも本当なんだろう・・・

「操緒も黙って見てないで、何か教えろよ」

「これ以上は、晴紀も知らない方が良いでしょう。これからの人生もつとめちゃくちゃになるから・・・」

おい、いきなり怖いこと言うなよ。しかも、満面の笑顔で・・・
女の子の笑顔は怖い物なのか？

それに、『もつと』って何だ？ これまでの人生もめっちゃくちゃだったね、みたいな言い方やめろよ・・・

それなりに、充実した人生を送って来てるんだ・・・多分・・・

「あつ そろそろ時間みたいだね」
といって上をも見上げた。

『そろそろ起こした方が良くないんじゃないか？』

音が反響しながら樋口の声が聞こえてくる

『そうよね 樋口ちよつとさがってて』

次の瞬間背中に激痛が走った・・・

操緒は笑っていた・・・

・・・鬼だ

目が覚めた時は、背中からの激痛と、死の予感がした。

和葉は俺を起こすために、わざわざ「かかと落とし」などという大技を使っていた。

「お前・・・そこまでする事ないだろ・・・ 普通に起こしてくれ普通に・・・」

遠のく意識の中、震える声で文句を言った

そして樋口が、机に倒れこむ俺に視線を合わせて、

「ハル、喜べ」

この状況で何を喜べばいいのだ！ と、心の中で叫んだ。

「昼だ」

俺はそれを喜べばいいのか・・・ て言うか俺は2時間も寝ていたのか！

「わーい お昼だー・・・」

よし！ 今俺に出来る精一杯の喜び方だ・・・

そのまま、俺は深い眠りにつこうとした時、樋口が目の覚ます一言を言った

「奴が・・・復活したそうだ」

俺はそれを聞いて目を見開いた

「その情報は確かか？」

「俺の情報網に引っかけたんだ。確かに決まってるんだろ」

樋口は、クラスでも有名なくらい情報通で知られている。

この学校の事なら何でも知っている。

そして、何故かこの学校にいる女子全員のスリーサイズ全てを知っている・・・ まともな手段で手に入れたとは思えない・・・

「奴が復活したか・・・ 大変な事になるぞ・・・」

樋口が真剣な顔で答えた

「俺たちも急がないと、間に合わなくなる・・・」

そして、この会話についていけない和葉は、俺と樋口の顔を見比べている

「え ちょ、何の話 何が復活したの？」

俺と樋口は、和葉のこの質問に声を合わせて、こう答えた・・・

「「コロッケサンド」」

和葉は、はっ？、と言った顔をしていた。

「だ、だったら何が大変な事になるの？」

この質問には、樋口が答えた

「コロッケサンドは大人気商品でな、これが売られている日はいつも購買部は人であふれかえる」

そしてそこに、俺がもう一説明足し加えた

「3ヵ月前までは、毎日コロッケサンドは購買部で売られていたんだ。でもある日、コロッケサンドをめぐって、14人が怪我、3人確信犯、30人コロッケサンド購入と言う大惨事が起きた・・・」

「確信犯って・・・」

和葉は呆れ返ったように言った
そこに樋口が、

「ハルもう時間だ。購買部が開くぞ」

現在時刻12…15

購買部開店時間12…30

「よし！分かった 今行く」

俺が和葉を残して教室を出ようとした時、いきなり樋口が和葉に向かって叫んだ

「苑宮、安心しろ。お前の分まで買ってきてやるから」

決めポーズまで決めていやがる・・・

この調子だと、今週中にもう一回振られるな・・・
そう思いながら、俺は購買部に向かい走っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7553y/>

ガイアの持ち主

2011年11月22日17時26分発行